

青年期の死の不安と死生観

——高齢者との比較から——

松 下 千 夏

序論

要約：本研究の目的は、高齢者における死の不安と死生観の特徴が現代青年に同様の傾向が見られるかどうかを比較検討した。大学生235名（男性133名、女性102名）を対象に、“死の不安尺度（Death Anxiety Scale; Templer, 1970；河合ら邦訳, 1996）”、“死生観尺度（平井ら, 2000）”、“老人用文章完成法テスト（以下, SCT: Sentence Completion Test; 下仲ら, 1975）”を行った。主な結果は次の通りである。1）高齢者と同じく、死の不安は女性の方が男性に比べて高かった。2）高齢者と同じく、女性の方が男性に比べて“死はこの世の痛みと苦しみからの解放である”、“死んでも魂は残る”、“寿命は最初から決まっている”と考える。3）高齢者と異なり、生と死のイメージにおいて性差は認められなかった。これは、アイデンティティの確立において、青年と高齢者では将来の可能性の有無により、アイデンティティの確立のレベルが異なる。さらに、アイデンティティの確立に影響を与える要因として時間的展望が考えられるが、青年は未来指向であり、高齢者は現実指向である。そのため、青年が持つ未来指向が青年の中の“理想自己”を高め、“理想自己”と“現在自己”の不一致を促したと言える。また、現在指向である高齢者は“自己一致”を導きやすく、青年と高齢者では異なる結果を示したと推察される。

キーワード：青年期；死の不安；死生観

Abstract: The purpose of this study was to examine the difference death anxiety and view of life-and-death between adolescence and the aged groups. Subjects were 235 (133 male, 102 female) undergraduate students. “Death Anxiety Scale (Templer, 1970; translated by Kawai etc, 1996)”, “Death Attitude Inventory (Hirai etc, 2000)” and “The Ageds’

Sentence Completion Test (Shimonaka etc, 1975)” administered to the subjects. The results were as follow: 1) Female showed death anxieties was higher than male in the same way as the aged group. 2) Female considered more than male that it in the same way as the aged group; It was “Death release from pain and suffering in this world.”, “If I die, soul is immoral.”, and “Human life decide, when I was born.” 3) The image of existence and death in adolescence did not showed sex differences which differ from the aged group. This difference was in standpoint of state of identity between adolescence and the aged whether the future of possibility had or not. In addition, it considered the aspect of time perspective as factor who established identity in adolescence and the aged. Adolescents were the future of time perspective, and the aged are the present of time perspective. Therefore, the future of time perspective which adolescents had been heighten “ideal-self” in adolescents, for it is suggested that “ideal-self” and “self” had not been inspired not self-congruence in adolescence. Also, the present of time perspective which the aged had been apt to guide to “self-congruence”, for it is suggested the difference in view of life-and-death between adolescence and the aged.

Key Words: adolescence, death anxiety, view of life-and-death

I 目的

(1) 目的およびその背景

現在、医療技術の進歩により、人々は病院にて死を迎えることが多くなった。平成18年度厚生労働省 人口動態統計特殊報告より、死因別の死亡場所の年次推移をみると、「全死因」で、昭和35年には70.7%が「自宅」で死亡していたが、昭和55年には「病院」の割合が50%を超え、平成16年には79.6%となっている。これらの数値から、我々は身近な人の死への関わりが減少している可能性が考えられる。

中里（2007）は、日本人の死に対する考え方の変化について次のように考察している。かつては自分の暮らす家で死ぬことがふつうであったが、今ではほとんどの人が病院で死を迎える。医学の進歩とともに医療は少しでも死期を遅らせる延命医療が標準と考えられるようになった。ホスピスやターミナルケアへの関心はその反映ともみられ、日本人の死に対する考え方も少しずつ変わってきたようである（p. 131参照）。

Deeken（2003）は、人間の死が病院の密室で迎えるようになった20世紀後半から、死のタブー化が強まったように考えられると指摘している。医療技術の進歩により、我々は身近な死

に触れることが限られてきた。しかし、医療技術の進歩は、我々に新たな問題を生み出す。それは、延命治療、末期医療、安楽死、脳死・臓器移植など生理的死をどのように迎えるかの問題である。

病院で死を迎えるケースが8割近くになり、我々は直接的な、身近に死について触れる機会は少なくなった。しかし、TVなど様々な情報源により死にまつわる事件や報道の特集などにより虚像による死の現実を目にするようになっていく。澤井（2000）は、このような状況について次のように述べている。医療、とりわけ安楽死や脳死など終末期医療にかかわる問題は、「死のタブーからの解放」において大きな比重を占める主題である。つまり、かつてはタブーであった死が、いまやその拘束から解き放たれ、自由に語られ、人々の目にさらされる対象となった（pp. 14-15参照）。

また、現代社会においてTVやゲームの普及は、人の生死に対して大きな影響を与えていると考えられる。小松（2000）は、TVやゲームが与える影響を以下のように述べている。TVやゲームは、空間や時間を超えた疑似体験を可能とし、死んでも再び生き返る登場人物をみるうちに、人間の生や死に関する捉え方が歪んだり、悪を懲らしめるためなら相手を殺しても許されるという価値観が強化される危険性もある（p. 102参照）。我々はマスメディアを通して語られる死について曝される機会が多くなり、非現実的な死のイメージを抱いている可能性がある。これらのことから我々の死に対する考え方は千差万別でその不安や恐怖も人によって違っている。実際に、多くの青年が死に対して不安や恐怖などの否定的な感情やイメージを抱いていると報告されている（藤井, 2003；一色・河野, 2000）。また、青年期が死に触れる機会が少ないゆえに、死への対処の仕方を知らず、死についてより不安・恐怖を抱く傾向があると考えられる（金児, 1994）。

青年期における死生観について述べたが、一方で、青年期の一般的な特徴について述べる必要がある。笠原（1976）は、次のように述べている。

まず、産業の増大によって、児童よりは年長の青年が労働者として求められるようになり、習得技術を得るために、家庭外の教育が発達していくようになり、それに伴い、法律なども強化され、青年は擁護されるようになった。また、戦争によるこの世代の人口の激減がなくなったことや、衛生面の向上により青年期の人口が増大した。そのような事情が青年期を独立させたのである。

今日、青年期の延長が言われている。そのような要因がさらに強められ、青年たちは、成人期へ移行することを意図的に延期していく。また社会は経済の発展と共に青年たちは「これで十分」という心理的なゴールがやって来ない不充足感があり、青年期延長、非成人化が知的階層から次第に拡大をし始めた（pp. 7-8参照）。

平成19年度文部科学白書によると、日本経済の発展は、教育の発展にもつながり、日本における大学進学率は、昭和35年10.3%（男性14.9%、女性5.5%）、昭和55年37.4%（男性41.3%、女性33.3%）、平成19年53.7%（男性54.9%、女性52.5%）である（p. 394参照）。これらの数値からも、我が国の教育水準の発展が伺える。現在、約半数以上の人が大学に進学している現状である。また、これらの数値は、1960年代から国家の政策として打ち出された能力主義による進学競争の結果であると考えられる。

しかし、この進学競争の結果は青年に多くの問題を与えた結果となっている。青年の問題として、白井（2006）は、戦後の歴史背景とともに以下のように述べている。

1945-1950年代は、深刻な食糧難と貧困から、学校の長欠児が増加し、生活のための非行が横行した。1960年代になると、農村から都市への人口集中し、耐久消費材の普及が始まる。これらを背景に、権力や管理、社会格差に対する行動や暴力が学生運動という形で現れ、それを国家は権力を持って鎮圧した。また、教育において少子化傾向から受験戦争など高い消費水準を維持するため、親が教育に投資し、進学競争が現れた。1970年代になると、60年代の受験戦争はさらに加速してくる。また、家庭では、父親の長時間労働や会社人間化して、家族で一緒に食事をとることも減少して家族のあり方が変容している。そうした家庭で育った青年の問題が、70年代半ば以降、不登校や高校中退などの問題として顕在化してくる。1980年代になると、競争や評価が日常生活に浸透し、その結果、互いに傷つかないうに距離を取り、干渉を嫌う人間関係が顕著になり、「人間関係の希薄化」が進行していく。1990年代になると、消費市場化するなかで、人と人との関係がモノやカネで媒介される傾向が進行し、生きている実感や人とつながっている実感がもてなくなり、それを得るために「非日常的な世界」や傷ついた自分の癒しを求め、人とつながっている自分を確かめていくようになる。また、不平等な競争が階層格差を拡大させ、自己選択による自己責任が強調され、青年が家族に依存せざるを得ない状況が強まるなか、青年が「自分を大切にしたい生き方をしたい」と願いつつも「なりたくないことははっきりしているが、何をしたいかわからない」などという状況が生み出された。若年者の労働市場が不安定化し、2000年代には、社会的な不利を抱える青年が社会とかかわり大人になるうえでの困難が増大している（pp. 10-11参照）。

青年期は、アイデンティティを達成する時期である。鑑（2002）は、以下のように青年期のアイデンティティ達成について述べている。

青年期の「自分」は、初めて自分が自分に対する問いとして、「自分は何者か、何者になろうとしているのか、何者になり得るのか」が始まるのである。そして、このような問いこそ、アイデンティティの達成に向かって発しているものである。アイデンティティにおける「自分」についての問いは、二つの方向からみていくことができる。第一に、自分を歴史的にとら

え直し、これまで生きてきた自分自身の生涯に位置づけ、将来を展望することである。第二に、自分を他者との関係の中で、他者と異なった独自性をもつものとして認めていくことである。集団の中であって、集団に呑みこまれない独自性を持ち得ることが、アイデンティティにおける第二の問いなのである (pp. 207-208参照)。

青年は社会の中に自分自身の存在を置いて考えるようになり、そして自分自身の存在に目を向け考え始める。そのため、どのように生き、どのように死ぬかという問題に関心を向けることが考えられる。丹下 (1995) は、「自我が発達するにつれて人は死に対して肯定的な見方をすることが可能となる (pp. 219-220参照)」と述べている。また、丹下 (1999) は、「青年期において死を主題として扱うことはその後の人生に対する基盤を形成することにもなる (pp. 327-332参照)」と述べている。小松 (2000) は、「死生観の形成においては、行動の指針となる価値観や倫理体系を学ぶことを発達課題とする青年期が重要な時期であると、青年期を対象として死の問題を取り扱う重要性を述べ、青年期の死生観を探ることは現代の日本人の死生観を明らかにすることにもつながる (p. 99参照)」と述べている。

このように、青年期に死を主題として扱うことは重要だと考えられる。現代の青年が置かれている社会的背景はすでに述べたが、このような社会的背景の中で青年が持っている死生観を探ることは、変わりゆく社会的背景における我々の死生観を明らかにすると考えられる。

下仲 (1980) は、自己概念を形成していく時代背景が両極に位置していると考えられる老年群と青年群を“文章完成テスト (Sentence Completion Test; 以下、SCT)”を用いて比較検討した。その質問項目において、『死に対してのイメージ』を“SCT”にて尋ねている。その結果、「老年群、青年群ともに約半数は『死に対してのイメージ』を客観的にみている。また、死を恐怖、悲哀、拒否感情で見ている反応は青年に多くみられた (p. 42参照)」と報告している。

河合 (1994) は、次のように日本の死生観の文化的要因を挙げている。日本人にとって、生と死を分ける隔壁は薄く、生と死が連続的にさえ受けとめられている。日本における生死の隔壁の薄さは、人間と他の存在、自と他、などの隔壁の薄さと相呼応しているのである。このことは、西洋の近代において、他から分離したものとしての「自我」が確立されたのと著しい差を示している。西洋の近代自我の確立の背後には、キリスト教による死生観が存在している。これに対して、日本では日本流の自然観を支えとして、日本人の自我は他との隔壁を薄くし、生死の隔壁も薄い死生観によって生きているのである (p. 338参照)。

また、死生観は個人的要因にも影響される。丹下 (1995) は、青年期的な発達と死生観の関係性及び死生観の発達的变化の方向性を調査した。その結果、「死生観は親しい人の死という直接的な経験のみによって形成されるのではなく、間接的な死の経験 (小説やニュース等)

を通してであっても同様に形成されうるものであるし、単に死にまつわる直接的・間接的な経験をすることによってその人の死生観が決定されるのではなく、その経験をした後その個人がどのような形でその事実を対処していくかということが大きく影響するということが示されている (pp. 219-220参照)」。したがって、死生観は、文化的要因と個人的要因によって成り立つと考えられる。

我々は日常生活において常に死を意識してはいない。しかし、命あるものはかならず死を迎える。Deeken (1990) は、生と死、両方において考える重要性を次のように述べている。死を抑圧して意識から締め出すことは、生への思考の貧困化と表裏一体の現象である (p. 83参照)。また、河合 (1994) においても同じく、次のように述べている。人間の生について考えるためには死について考えねばならないし、死について考えることは生についての考えを引き起こす。この両者は分かち難く結びついていて、一方だけを忘れて、一方だけを考えはじめると不毛になることが多い (p. 321参照)。命の終末を平穏に迎えるためには、普段から死を自分の問題として意識し、死ぬべき存在としての自己を受け入れることが必要である (河合ら, 1996)。高齢者と青年ともに、いつか訪れる自らの死を考えることは、いかに自分の人生を生きるかということにつながると考えられる。

(2) 先行研究の概観

辰巳 (2000) は、“死の不安尺度 (Death Anxiety Scale; 以下、DAS; Templer(1970), 河合ら (1996) 邦訳)”と“死生観尺度 (平井ら, 1999)”を用いて、高齢者の死の不安と死生観における性差について検討した。対象者は、シルバー市民講座に参加している65歳以上の高齢者であり、内訳は、男性46名 (平均年齢70.91歳、SD=3.85、年齢範囲65~79歳)、女性32名 (平均年齢70.88歳、SD=3.73、年齢範囲65~81歳) である。手続きは、対象者に郵送にて回答を依頼した。

その結果、「死の不安には性差が認められ、女性の方が不安が高かった。同時に死生観にも性差があり、女性は男性に比べて『死はこの世の痛みと苦しみからの解放である』、『死んでも魂は残る』、『寿命は最初から決まっている』と考える者が多かった (pp. 49-64参照)」と述べている。

岡 (1987) によって導き出された「男性は死を冷静に受け止め、避けられないことであるとしつつも、それまでの残された時間をできうる限り、充実させ有効に使う意欲がみられ、Positive な姿勢を示す傾向があり、女性は、死に対して逃避的で拒否的態度が見られる」という心理特性が社会背景の変化によらず引き継がれているかどうかを検討するため、石野 (2007) は、岡 (1987) の追試を行った。対象者は、65歳以上の高齢者112名 (男性39名、女性72名、性別不詳者1名、平均年齢76.45歳、SD=6.98) である。手続きは、対象者の家族や友人、同僚が質

問紙の説明を行い実施した。

その結果、「1980年代と2000年代という時代差による社会的背景の違いはあるものの、岡(1987)によって導き出された心理特性が男女ともに引き継がれていた(pp.1-51参照)」と述べている。

(3) 先行研究の問題点

辰巳(2000)は青年期(大学生)を対象にして作られた“死生観尺度”を用いているが、青年期を対象に検討をしていない。また、“死生観尺度”の質問項目において、“DAS”と内容が重複する項目を削除し、残った6項目を用いている(表1参照)。尺度内の項目を削除した結果、死生観尺度の信頼性・妥当性に問題があると考えられる。

表1 辰巳(2000)が用いた死生観項目

		男性	女性	性差
死生観についての質問項目	死はこの世の痛みと苦しみからの解放だと思う。			
	死んでも魂は残ると思う。			
	人は死後、また生まれ変わると思う。			
	死後の世界はあると思う。			
	人の寿命は最初から決まっていると思う。			
	世の中には「霊」が存在すると思う。			

石野(2007)は、“老人用 SCT”を用いて死生観を検討しているが、その研究結果は高齢者特有のものとして現れた結果であるのか、そうでないのかを検討していない。青年期と老年期という世代差による死生観の差異について確かめる必要がある。

辰巳(2000)と石野(2007)は、高齢者を対象としており、社会的背景の変化による影響も考えられる。医学、教育、経済の発展についてはすでに述べたが、その他の社会背景の要因として、以下のものが挙げられる。

第一に、青年と高齢者における戦争体験の有無である。1941年、第二次世界大戦が始まり、1945年に終戦を迎えた。辰巳(2000)と石野(2007)が、対象としている高齢者は戦争を体験している。一方、本研究が、対象としている青年は戦争を体験していない。第二に、科学技術の発展により、1950年代以降、日本は高度経済成長を迎え、仕事を求めて人々は農村から都市に住むようになり、都市化が進んだ。多くの青年たちが都市に移り住んだため、農村では高齢者のみが住む家庭が増加し、都市では核家族が増加した。第三に、社会のデジタル化である。1953年、NHKのテレビ放送が開始し、我々の生活に欠かせないものとなった。NHK放送文

化研究所・編（2006）によると、国民全体でのテレビの行為者率（行為者率とは、その行動を行った人の数）は、曜日にかかわらず安定して9割に達している。行為者率が9割を超える行動は、睡眠、食事などの必需行動しかなく、テレビがそうした行動と肩を並べる、必需性、習慣性、日常性のきわめて高いメディアであることと示している。また、テレビを長時間観ているのは、男女70歳以上で、一日の視聴時間は各曜日とも5時間を越えている。一方、男女20代以下は曜日を問わず視聴時間が短い。したがって、高齢者は青年よりもテレビを観る時間が長く、デジタル化の影響が考えられる。

以上から、本研究では、死の不安と死生観において、社会的背景の変化によらず、石野（2007）と辰巳（2000）の死生観の特徴が、現代青年に同様の傾向がみられるかを比較検討する。また、本研究では、青年期を対象とするので、「死の不安」を松田（1996）の死の不安の定義を用いる。その定義は、“死が現前していないときの、いずれは自分にも死が訪れる可能性に対する漠然とした恐れ”である。そして、「死生観」を辰巳（2000）の死生観の定義を用いる。その定義は、“「死生観」を生や死に関する全般的な概念とすると、「死後性」とは死後に関する限定的な概念といえる”である。

（4）仮説の設定とその理由

仮説1 『死の不安には性差が認められ、女性の方が不安が高い』

仮説2 『死生観には性差があり、女性は男性に比べて「死はこの世の痛みと苦しみからの解放である（解放としての死）」、「死んでも魂は残る（死後の世界観）」、「寿命は最初から決まっている（寿命観）」と考える者が多い』

仮説3 『“SCT”項目11（生きているということは）において、男性は肯定反応が有意に多く、否定反応は有意に少ない。女性は肯定反応が有意に少なく、否定反応が有意に多い』

仮説4 『“SCT”項目12（死というものは）において、男性は肯定反応が有意に多く、否定反応は有意に少ない。女性は肯定反応が有意に少なく、否定反応が有意に多い』

仮説1及び仮説2は辰巳（2000）の高齢者研究の追試となる。辰巳（2000）は、次のように研究結果を述べている。死の不安における性差を検討するためt検定を行った結果、1%の危険率において、女性のほうが死に関する不安が高いと示唆された。また、死生観における性差を検討するためt検定を行った結果、1%の危険率において「死はこの世の痛みと苦しみからの解放である（解放としての死）」、「死んでも魂は残る（死後の世界観）」、5%の危険率において、「寿命は最初から決まっている（寿命観）」の項目において、性差が確認され、いずれも女性の方が得点が高かった。

仮説3及び仮説4は石野（2007）の高齢者研究の追試となる。石野（2007）は、次のように

研究結果を述べている。“SCT”項目11（生きているということは）の反応と性差の関係性について、有意差は認められなかった。だが、“SCT”項目12（死というものは）の反応と性差の関係性について、5%の危険率において、有意差が認められた。男性において、否定反応観測者数が有意に少なく、肯定反応観測者数が有意に多いことが認められた。女性では、否定反応観測者数が有意に多く、肯定反応観測者数が有意に少ないことが認められた。

したがって、本研究では、仮説1及び仮説2において、辰巳（2000）の研究結果が青年層にも支持されるかどうかを検討する。仮説3及び仮説4において、石野（2007）の研究結果が青年層にも支持されるかどうかを検討する。

II 方法

(1)調査の対象者

近畿圏内における短期大学、4年制大学、大学院の男女学生を対象とする。回答者数は242名である。年齢区分は、笠原（1976）の青年期の区分に従い、「青年後期（17歳前後から22、23歳前後）」、「プレ成人期（22、23歳前後から30歳前後まで）」とする。年齢対象外は7名である。

有効回答者数は、235名（平均年齢20.88, SD=1.58）であり、有効回答率は97%であった。ただし、本研究では、欠損データ（回答拒否・未記入者）も死に対しての考えることの拒否やバイアスがあると考え有効回答者に含んだ。男性133名（平均年齢20.90, SD=1.64）、女性102名（平均年齢20.85, SD=1.49）であった。

(2)調査期間および調査実施手続き

2008年6月1日～2008年7月31日の間に、以下の項目からなる質問紙調査を講義時間内に集団法にて実施し、その場で回収をした。所要時間は20分程度であった。

本研究では、実施の際に質問紙の内容が死に関するものを中心に回答を求めていること、また、回答拒否ができることを調査協力者に明示した。

(3)手続き

① 死の不安 (DAS)

Templer（1970）が開発し、河合ら（1996）が邦訳した“DAS (Death Anxiety Scale)”を用いた。2件法により回答を得、「あてはまる」に1点、「あてはまらない」に0点を与えた。Cronbachの信頼性係数を算出したところ、 $\alpha=0.75$ であった。そこで全項目15項目の得点を合計し、DAS得点（得点範囲0～15点）を算出した。得点が高いほど、死の不安が高いことを示す。

② 死生観についての質問項目

平井ら（2000）が作成した“死生観尺度”を用いた。「死後の世界観」、「死への恐怖・不安」、「解放としての死」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「死への関心」、「寿命観」の7因子で構成されている。項目数は、「寿命観」は3項目で構成されており、その他の項目は各4項目で構成されている。合計27項目である。回答において、平井ら（2000）は7件法の「当てはまる」から「当てはまらない」までを1点から7点として得点化しているが、本研究は、辰巳（2000）の追試であるため、辰巳（2000）の評定法と同じく、4件法により回答を得、「あてはまる」に3点、「まああてはまる」に2点、「あまりあてはまらない」に1点、「あてはまらない」に0点を与え得点化した。各項目の得点範囲は0～3点であり、得点が高いほど、あてはまる度合いが高いことを示している。これらの尺度項目は尺度の合計得点としては扱わず、項目ごとに分析した。

③ 青年期の自己概念における質問項目

下仲ら（1975）が作成した“老人用 SCT”を用いた。“SCT”は「家庭、友人、健康・老化イメージ」、「自己イメージ」、「生と死のイメージ」、「価値観」の4要因で構成され、計15項目である。“SCT”の項目の詳細は以下の通りである。

- ・「家庭、友人、健康・老化イメージ」一項目1（たいていの家族にくらべると私の家族は）、項目2（家の人びとは、私を）、項目3（私とよく気の合う人びとは）、項目4（私の身体は）、項目5（年をとると）
- ・「自己イメージ」一項目6（これまでは）、項目7（今の私の生活は）、項目8（私はよく人から）、項目9（いつかそのうち私は）、項目10（私が気になるのは）
- ・「生と死のイメージ」一項目11（生きるということとは）、項目12（死というものは）
- ・「価値観」一項目13（私が生きている喜びを感じるのは）、項目14（今の老人は）、項目15（私の人生は）

なお、質問紙の説明及び実施は、質問紙作成者が行った。

(4) 調査方法の信頼性

本研究では、独立変数以外で従属変数に影響を与える要因を統制するために以下のことを実施した。

第一に、質問項目の文言や適切さを検討するため、20代の男性10名、女性7名に予備調査を行った。

第二に、石野（2007）は対象者が高齢者であるため、心理的負担を考慮し10項目と項目を削除したが、本研究では全項目を使用し下仲ら（1975）と同様の手続きを行った。本研究では高

年齢と青年期を比較研究として用いた下仲（1980）の“SCT”項目、15項目を引用した。

第三に、調査協力者が与える心理的影響を統制するため、質問紙の内容が死に関する内容であること、また回答拒否ができることを明示した。

(5) 結果の整理方法

“DAS”と“死生観尺度”の質問紙において、辰巳（2000）の整理方法と同じく、本研究では、“DAS”、“死生観尺度”の質問各項目において、性差が見られるかどうか検討するため、 t 検定を行う。

“SCT”の質問紙において、下仲ら（1975）の作成した評定基準を参考に、“SCT”の各内容を肯定、中立、否定に設定し、そのカテゴリーに従って分類する。反応の分類は、2人の判定者（筆者及び、臨床心理学を学ぶ大学院生、臨床心理学系大学院修了者）が各反応を独立して判定した。

本研究では、肯定反応、否定反応を取り上げ、カイ2乗（ X^2 ）検定により、性差による“SCT”の各項目で違いが表れるかを検討する。

III 結果

(1) 仮説検証に関連する項目の結果

仮説を検証するために、それと関連する項目を以下のようにまとめた。

仮説1『死の不安には性差が認められ、女性の方が不安が高いについて』

“DAS”において、平均値（男性8.03点、女性9.61点）、中央値（男性9.00点、女性10.00点）、最頻値（男性10点、女性10点）、得点範囲（男性0-15点、女性2-15点）であった。

“DAS”において、正規性の検定を行ったところ、正規分布ではなかった。そのため、パラメトリック検定である t 検定ではなく、ノンパラメトリック検定であるMann-Whitneyの U 検定を実施したところ、性差が見られた（ $U=4560.0, p<.001$ ）（表2参照）。

仮説2『死生観には性差があり、女性は男性に比べて「死はこの世の痛みと苦しみからの解放である（解放としての死）」、「死んでも魂は残る（死後の世界観）」、「寿命は最初から決まっている（寿命観）」と考える者が多いについて』

“死生観尺度”において、正規性の検定を行ったところ、各項目すべてにおいて、正規分布でなかった。そのため、ノンパラメトリック検定である、Mann-Whitneyの U 検定を行ったところ、「死んでも魂は残ると思う（死後の世界観）」（ $U=4802.0, p<.001$ ）、「人は死後また生まれ変わると思う（死後の世界観）」（ $U=5285.0, p<.01$ ）、「死後の世界はあると思う（死後の世界観）」（ $U=5361.0, p<.01$ ）、「死ぬことがこわい（死への恐怖・不安）」（ $U=5211.5, p<.01$ ）、

「自分が死ぬことを考えると、不安になる（死への恐怖・不安）」（ $U=5416.5, p<.01$ ）、「死は痛みと苦しみからの解放である（解放としての死）」（ $U=5136.0, p<.01$ ）、「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている（解放としての死）」（ $U=5754.0, p<.05$ ）、「私は死をこの人生からの重荷からの解放だと思っている（解放としての死）」（ $U=5540.5, p<.05$ ）、「自分の死について考えることがよくある（死への関心）」（ $U=5648.5, p<.05$ ）、「身近な人の死をよく考える（死への関心）」（ $U=5623.5, p<.05$ ）、「家族や友人と死についてよく話す（死への関心）」（ $U=5656.0, p<.05$ ）、「寿命は最初から決まっていると思う（寿命観）」（ $U=5595.0, p<.05$ ）の項目において性差が見られた（表2参照）。

表2 “DAS”、“死生観尺度”についての質問項目における平均得点

			男性	女性	性差
DAS			8.03	9.61	***
死生観尺度についての質問項目	死後の世界観	死後の世界はあると思う。	1.39	1.80	**
		世の中には「霊」や「たたり」があると思う。	1.50	1.54	
		死んでも魂は残ると思う。	1.08	1.58	***
		人は死後また生まれ変わると思う。	1.19	1.55	**
	死への恐怖・不安	死ぬことがこわい。	1.71	2.13	**
		自分が死ぬことを考えると、不安になる。	1.45	1.81	**
		死は恐ろしいものだと思う。	1.39	1.64	
		私は死を非常に恐れている。	1.20	1.42	
	解放としての死	私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている。	0.60	0.83	*
		私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている。	0.54	0.75	*
		死は痛みと苦しみからの解放である。	0.66	0.98	***
		死は魂の解放をもたらしてくれる。	0.63	0.78	
	死からの回避	私は死について考えることを避けている。	0.80	0.88	
		どんなことをしても死を考えることを避けたい。	0.59	0.70	
		私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする。	0.76	0.84	
		死は恐ろしいのであまり考えないようにしている。	0.84	0.89	
	人生における目的意識	私は人生にははっきりとした使命と目的を見出している。	1.21	1.10	
		私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある。	1.26	1.25	

		私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりしている。	1.12	1.18	
		未来は明るい。	1.65	1.86	
	死への 関心	「死とは何だろう」とよく考える。	1.44	1.54	
		自分の死について考えることがよくある。	1.38	1.66	*
		身近な人の死をよく考える。	1.39	1.67	*
		家族や友人と死についてよく話す。	0.55	0.78	*
	寿命観	人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う。	1.06	1.21	
		寿命は最初から決まっていると思う。	0.93	1.23	*
		人の生死は目に見えない力（運命・神など）によって決められている。	0.95	1.17	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

仮説3 『“SCT” 項目11（生きているということは）において、男性は肯定反応が有意に多く、否定反応は有意に少ない。女性は肯定反応が有意に少なく、否定反応が有意に多いについて』

“SCT” 項目11の反応と性差の関係性について、2（肯定/否定反応）× 2（男性/女性）で独立性のカイ2乗検定を行った。その結果、有意差は認められなかった（表3参照）。

仮説4 『“SCT” 項目12（死というものは）において、男性は肯定反応が有意に多く、否定反応は有意に少ない。女性は肯定反応が有意に少なく、否定反応が有意に多いについて』

“SCT” 項目12の反応と性差の関係性について、2（肯定/否定反応）× 2（男性/女性）で独立性のカイ2乗検定を行った。その結果、有意差は認められなかった（表3参照）。

表3 男女における生と死のイメージ

項目	反応	男性	女性	X ²
11 生きるということは	肯定	56	48	
	否定	27	16	
12 死というものは	肯定	17	12	
	否定	44	29	

(2)仮説以外の考察に必要な結果

“DAS” の得点における人数分布

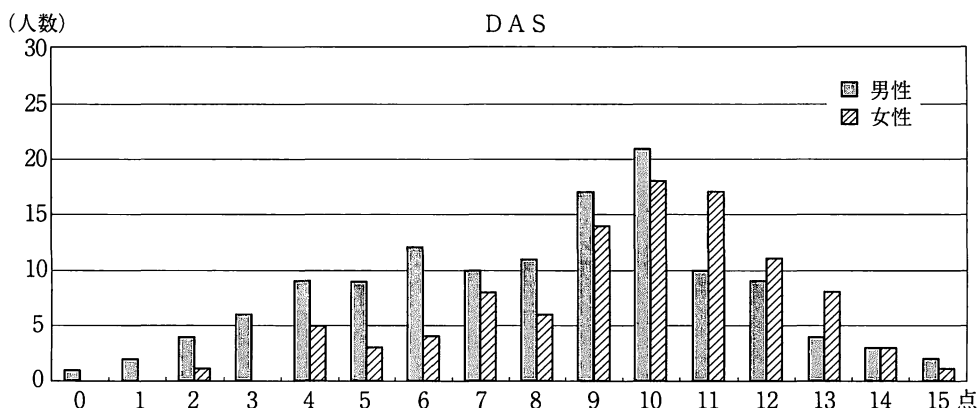


図1 “DAS” の得点における人数分布

“DAS” の得点分布をみると、男女ともに低得点層が多かった。

Ⅳ 考察

(1) 仮説1 及び仮説2 の検証からみられる死生観に関して

表2より、有意差は認められ、仮説1 及び仮説2 は支持された。仮説1 及び仮説2 について、死の不安の観点から考察していく。

辰巳 (2000) は、 t 検定を用いて検討しているが、本研究では“DAS”において、正規性の検定を行ったところ正規分布に基づかなかったため、 t 検定を用いることはできなかった。また、“死生観尺度”においても同様に正規性が認められなかった。

正規分布に基づかなかった要因として以下の二点が考えられる。第一に、調査協力者の偏りである。図1の“DAS”の得点分布によると、低得点層が多く、偏りを生じさせている。金児 (1994) は、“DAS”の弱点として、「“DAS”の低得点層には、死の不安の低さや死の拒絶や無関心も含まれており、回答内容が一義的でないこと (p.4参照)」を述べている。第二に、調査協力者の個人差を検出できなかったことである。“DAS”項目では、2件法を用いたため、個人差が検出できなかったことが考えられる。また、“死生観尺度”項目では、作成者の平井 (2000) は7件法を用いているが、本研究では4件法を用いたため、個人差を検出できなかったことが考えられる。

そこで、本研究では“DAS”項目において Mann-Whitney のU検定を行い、その結果、女性 は男性よりも不安が高く性差が認められた。同様に、“死生観尺度”項目において Mann-Whitney のU検定を行い、その結果、「死んでも魂は残ると思う (死後の世界観)」、「死は痛みと苦しみからの解放である (解放としての死)」、「寿命は最初から決まっていると思う (寿命

観)」の項目において、男性よりも女性の方が平均得点が高く性差が認められ、辰巳（2000）の結果と同様の傾向が見られた。したがって、青年及び高齢者において死の不安は女性のほうが高いと言える。

女性が男性よりも死の不安が高くなる要因として石野（2007）は、次のように述べている。女性は死の不安に直面化する過程で、死の不安によって不安定になった自己を安定させるため、一種の防衛機制のようなものを働かせ、漠然とした未来を肯定的に捉えようと反応する。また、男性よりも女性は死に強い不安を感じるため、この反応は女性特有のものと推察される（p. 34 参照）。

石野（2007）は、高齢者を対象としているが、死の不安に対する防衛機制は青年期にもみられていることが推察される。そのため、防衛機制が内的要因となり、死生観項目の「死後の世界観」や「解放としての死」において、性差が認められたことが推察される。

また、死の不安の性差について男尊女卑という社会制度の影響も考えられる。下仲（1980）は、「死の不安において、女性が男性よりも高い傾向の背景として、男尊女卑の強い明治の社会制度による影響を挙げ、この影響は高齢者だけでなく青年にも引き継がれている（p. 43 参照）」と述べている。

本研究の得た結果から以下のことが示唆される。すなわち死の不安は女性のほうが高く、その要因として死の不安によって不安定になった自己を安定させるため、女性は一種の防衛機制のようなものを働かせ、漠然とした未来を肯定的に捉えようとする傾向が男性よりも高い。また、環境要因として男尊女卑という社会制度の影響も考えられる。

(2) 仮説 3 及び仮説 4 の検証からみられるアイデンティティに関して

表 3 より“SCT”項目11（生きるということは）と“SCT”項目12（死というものは）において男性と女性では有意差は認められず、仮説 3 及び仮説 4 は支持されなかった。

石野（2007）では高齢者において、「男性は死を冷静に受け止め、避けられないことであるとしつつも、それまでの残された時間をできうる限り、充実させ有効に使う意欲がみられ、Positive な姿勢を示す傾向があり、女性は、死に対して逃避的で拒否的な態度が見られた（pp. 1-51 参照）」と述べている。

つまり、石野（2007）の研究結果では、死のイメージにおいて性差が認められたが、生のイメージにおいて性差は認められなかった。本研究では、生のイメージ（項目11）及び死のイメージ（項目12）において性差は認められなかった。したがって、本研究では石野（2007）の生のイメージの研究結果が同様の傾向をみたが、死のイメージは結果を異にするものになった。

これは、高齢者と青年における発達課題が影響を与えたと考えられる。Erikson etc（1986）

は、発達段階について以下のように述べている。

青年期（Erikson は思春期としている）の段階の基本的緊張は、心理社会的アイデンティティの感覚の発達と避けることのできないアイデンティティの混乱との相互作用との間の緊張である。この緊張が解けると、自然にでき上がってくるその人自身のアイデンティティにも、また、現に存在するかあるいは現れつつある理想的な世界像と自分のアイデンティティを融合させるのに役立つ総合的な方向付けにも忠誠の感覚が現れてくる。

ライフサイクルの最後を締めくくる段階として、老年期の課題は統合であり、この段階に充満する絶望という感覚との間でのバランスを追求する上で支配的な同調的性向である。最後の力は英知であり、その英知とは、死そのものを目前にしての、人生そのものに対する超然とした関心であり、身体的精神的機能の衰えにもかかわらず、経験の統合を保持し、それをどう伝えるか学ぶ。連続するそれぞれの段階において、前にあった葛藤は、現在の発達レベルに関連して再び解決しなければならない（pp. 9-54参照）。

連続する発達段階において、青年期はアイデンティティを確立することが課題であるが、そのアイデンティティの感覚の発達と混乱との間に位置する。老年期は統合する時期であり、その統合においては、前の段階にあった葛藤を解決することが課題となる。

岡本（2005）は、アイデンティティについて次のように述べている。青年期は、親からの自立を試み、アイデンティティ形成の時期にある。中年期は、自分の人生の見直しと後半生への向けての生き方の再方向づけというアイデンティティの危機に直面している。老年期は、自分の人生をふり返り、自己の人生と死の受容という、アイデンティティの危機に直面している（p. 31参照）。青年期では、アイデンティティの形成が課題となるが、その形成されたアイデンティティは青年期以降も、ライフサイクルに応じてアイデンティティの危機に直面する。だが、青年期、中年期、老年期では、異なる課題を解決していかなければならない。

村瀬（1979）は、青年期と老年期のアイデンティティの差異について次のように述べている。青年期が、新しい飛躍のために児童期に決算をつける時期であったのに対して、老年期は自分の一生に決算をつけて次の世代に引継ぎを行う時期である（p. 157参照）。

将来の可能性というレベルにおいて、青年期と老年期は質的に異なるアイデンティティの発達課題であることが考えられる。将来の可能性の有無は青年と高齢者がもつ時間的展望にも影響があると推察される。

（3）仮説3 及び仮説4 の検証からみられる時間的展望に関して

人生における時間を考えると、高齢者にとって、死は配偶者や同僚、友人などの死を経験し、より死は身近な存在であり、高齢者自身にとって近い存在である。しかし、青年にとって、死

は高齢者が体験するほどない。彼らに表現される死は「死後をイメージする」や「人生の終わり」というイメージであり、青年自身にとって遠い存在である。それらの違いは、将来の可能性というレベルで考えられる将来展望の指向性である。つまり、青年と高齢者では時間的展望の指向性が異なるものになる。

青年の死のイメージ（項目12）において反応内容を検討したところ以下の結果が得られた。

肯定反応について、表3より男性は17名であり、「始まり」、「繰り返す」、「世界を変える」、「転生」といった死後をイメージする反応が6名（35%）、「誰かにいいものを残すための人生。その終わり」、「人生の最期です。みんなに看取ってもらいたい」、「その後、生きている者に教えること」といった人生の終わりをイメージし、他者との関係性を表した反応が3名（18%）であった。また「後悔しないように生きるためにある」、「幸せを感じるためにある」、「生き方を考えさせるためにある」といった「死というものは」から生じる考え方が3名（18%）であった。死という項目に対して「生きるということ」といった反応、「いつか自分も」、「生きることに満足したときにそうになりたい」といった自己の死をイメージした反応、「そこに至るまで苦しいが訪れると安らぐもの」といった死への過程をイメージした反応、「苦しい人生からの脱出装置」といった反応が各1名であった。

それに対して、女性は12名中、「始まり」、「再生」、「違う人生を歩む」、「休憩」といった死後をイメージする反応が5名（41%）であった。「ちゃんと生きたものに与えられるゴール地点」、「人生を全うしたときに訪れるもの」といった人生の終わりをイメージした反応が2名（17%）であった。また「人生を深める」、「死ぬときに意味がわかる」といった「死というものは」から生じる考え方が2名（17%）であった。「勇気である」、「時として甘美なものとして認識される」、「役目を果たしたということ」といった「死というものは」から生じる考え方がそれぞれ各1名であった。

否定反応について、表3より男性は44名であり、「終わり」、「ゴール」、「終着点」、「締めくくり」、「生の最期の過程」といった人生の終わりをイメージしたものが17名（43%）、「怖い」、「恐怖」、「虚しい」といった感情レベルものが7名（16%）、「無」となるとイメージしたものが4名（10%）、「最愛の人との別れ」、「全ての人との別れ」といった他者との別れといった関係性を表したものが4名（10%）であった。自分自身の存在が「いなくなる」といった反応が2名（5%）、「悲しい」、「何も残らない」、「未来が無くなること」、「多くの人が恐れているもの」、「頑張らないこと」、「ついて回る」、「リストラ」、「遺産争いを起こすもの」、「人によって早いか遅いかの違い。死んだらそれまで」、「肉体の衰弱」といった反応が各1名得られた。

それに対して、女性は29名中、「終わり」、「ゴール」、「終着点」といった人生の終わりをイメージしたものが11名（38%）、「怖い」、「恐ろしい」といった感情レベルものが7名（24%）、

「会えなくなる」、「誰にも関心を持たず、誰にも関心を持たれない事」といった他者との別れといった関係性を表したものが2名(7%)、「悲しい」、「受け入れ難い」、「来て欲しくない」といった思い、「無」となるとイメージした反応、自分自身の存在が「いなくなる」といった反応、「先が無い」、「先の見えない暗闇」、「向上が止まる」、「あっけない」といった反応が各1名得られた。

また、肯定反応では、男女ともに「死後をイメージする」という反応が最も多く得られ、否定反応では男女ともに同様のカテゴリーで分類され、男女ともに「人生の終わり」をイメージした反応が多く得られた。

石野(2007)は、高齢者の死のイメージの反応結果を次のように述べている。死を否定的に捉えた場合、男女ともに感情レベルで捉えがちな傾向は共通している。しかし、死を肯定的に捉えた場合、女性は否定反応と同様、感情レベルで捉えがちであるが、男性は客観的な理解の上に感情レベルで死を受容する傾向があると言える(p.29参照)。

青年期の死のイメージにおいて、多く得られた肯定反応「死後をイメージする」、否定反応「人生の終わり」とともに表現の仕方は異なるが、時間的に未来を示している。高齢者の結果においては、男女ともに感情レベルで死を捉えているということは、「死というものは」という刺激語に対して、その語を見た時に起こった感情は、自身により気づいている「いま、ここで」感じている部分だといえる。つまり、時間的に現在を示していると考えられる。

白井(1997)は、青年期から老年期にいたる時間的展望の発達の研究を実施し、その結果を次のように述べている。青年期から成人前期は未来指向だが、老年期は現在指向であり、中年期は転換期である。ただし、これは、ある年齢になると必然的にそうなるというのではなく、世代的・状況的要因と相互作用しながら現実化すると言えよう(p.182参照)。

本研究の得た結果から以下のことが示唆される。青年は時間的展望が未来指向であり、高齢者は現在指向である。

(4)総合的考察と今後の課題

本研究において青年期と高齢者の死生観を比較したところ以下のことが示唆される。死の不安は女性のほうが高く、その要因として死の不安によって不安定になった自己を安定させるため、女性は一種の防衛機制のようなものを働かせ、漠然とした未来を肯定的に捉えようとする傾向が男性よりも高い。また将来の可能性というレベルにおいて、青年期と老年期は質的に異なるアイデンティティの発達課題であり、前者がもつ時間的展望は未来指向であり、後者がもつ時間的展望は現在指向である。

異なる時間的展望の指向性は青年と高齢者の自己一致と不一致に影響を与えていると思われ

る。

Rogers (1951) は、カウンセリングにおける、クライアントが次第に自己に対して肯定的な知覚をするようになっていくプロセスを理想自己と現実自己の一致度が増えるプロセスとして示した。Rogers (1959) によれば、理想自己とは個人が非常にそうありたいと望んでおり、それに最も高い価値を置いている自己概念を意味する。

北村 (1962) は、青年期の理想自己を次のように述べている。自己概念そのものが形成の過程にある青年期では、理想自己が支配的になって現実自己が無視されたり軽視されたりする。

青年は未来指向であることが、自身の理想自己を高めさせ、自己不一致を促している。そのため、青年では有意差は認められなかったと言える。それに対して、高齢者は時間的展望が現在指向であることで、青年ほど理想自己は高くなく、現実自己と理想自己の乖離が青年ほど大きくないといえる。つまり、未来への期待が青年の理想自己を高めさせ、さらに自己不一致を導いたことが、本研究と石野 (2007) の研究結果を異にした要因であると推察される。

白井 (1997) は、「生涯発達の視点から時間的展望が人生のそれぞれの発達段階に応じて人間の行動を理解する上で重要であり、青年期の自我同一性の達成には、社会的自立という目標を目指した行動が重要になるので、現在と結合したポジティブな未来指向への変化が必要である (p. 139参照)」と述べている。生のイメージにおいて、否定反応より肯定反応が男女ともに多いことは、現在と結合した肯定的な未来指向への変化と考えられる。

また、生のイメージにおいて多様な反応が得られたことは、死のイメージと同様に、将来の可能性というレベルが含まれたアイデンティティ確立の発達課題と将来展望の指向性が影響したものと推察される。

本研究では青年期と高齢者において、生死のイメージは将来の可能性というレベルが含まれたアイデンティティの発達課題と将来展望の指向性が影響したものと推察された。しかし、白井 (1997) が述べているように、中年期は時間的展望の転換期である。中年期は生死のイメージ、また自己一致においても転換期であると考えられるので、中年期を対象とした研究を今後の課題としたい。

V 文献

- Deeken, Alfons (1990) 死生観の変遷をめぐる一考察, 人間学紀要, 上智大学人間学会, 20, pp. 75-90
- Deeken, Alfons (2003) 生と死の教育, 岩波書店, p. 16
- Erikson, E. H, Erikson, J. M. & Kivnick, H. Q. (1986) Vital Involvement in Old Age, W. W. Norton : 朝長正徳・朝長梨枝子訳 (1990) 老年期; 生き生きしたかわりあい, pp. 9-54,

みすず書房

藤井美和 (2003) 大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析, 関西学院大学社会学部紀要, 95, pp. 145-155

平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000) 死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性—, 死の臨床, 23, pp. 71-76

一色康子・河野政子 (2000) 看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究—調査項目の所属間の比較による分析—, 看護学総合研究, 2, 1, pp. 57-61

石野学 (2007) SCT による高齢者の死生観の研究, 龍谷大学大学院修士論文, pp. 1-51

金児曉嗣 (1994) 大学生とその両親の死の不安と死観, 大阪市立大学文学部紀要, 人文研究, 46, 10, pp. 1-28

笠原嘉 (1976) 今日の青年期精神病理像, 青年の精神病理, 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦編, 弘文堂, pp. 3-27

河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996) 老年期における死に対する態度, 老年社会科学, 17, 2, pp. 107-116

河合隼雄 (1994) 死ぬとはどういうことか, 河合隼雄著作集13生きることと死ぬこと, 岩波書店, pp. 321-325

河合隼雄 (1994) 日本人の死生観, 河合隼雄著作集13生きることと死ぬこと, 岩波書店, pp. 334-344

北村晴朗 (1965) 自我の心理, 誠心書房

小松万喜子 (2000) 日本の現代の青年の死生観とその教育課題, 佛教大学大学院紀要, 28, pp. 99-114

厚生労働省 平成18年人口動態統計特殊報告, 心疾患—脳血管疾患死亡統計の概況,

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyuu/sinno05/index.html>(2009. 03. 31)

文部科学省 平成19年度 文部科学白書 参考資料 p. 394

松田信樹 (1996) 青年の死の不安を規定する要因についての検討—性差、死別経験、時間的展望の観点から—, 人間科学研究, 4, 1, pp. 57-65

村瀬孝雄 (1979) 老年期の課題, 臨床心理学の基礎知識, 佐治守夫・水島恵一編, 有斐閣ブックス, p. 157

中里克治 (2007) 高齢者と死, 下仲順子編, 高齢期の心理と臨床心理学, 培風館, p. 131

NHK 放送文化研究所・編 (2006) 日本の生活時間・2005, NHK 国民生活時間調査, 日本放送出版協会, pp. 39-41

岡本祐子 (2005) 家族発達論, 監修上里一郎, 成人期の危機と心理臨床—壮年期に灯る危険信号とその援助—, ゆまに書房, pp. 26-31

岡由紀子・蘭香代子 (1987) 同居家族における高齢者の SCT にみられる心理特性について, 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要, 18, pp. 71-79

Rogers, C. R.: Client-Centered Therapy (1951) Its current practice, implications and theory. Boston, Houghton Mifflin Company, 友田不二男編訳 (1966) サイコセラピー, 岩崎学術出版

Rogers, C. R. (1959) A Theory of Therapy, Personality and Interpersonal Relationships as Developed in the Client-centered Framework. In S. Koch (ed), Psychology: A Study of a Science vol. 3. Formulation of the social Construct. New York : McGraw-Hill. pp. 184-256. 伊東博編訳 (1967) パーソナリティ理論, 岩崎学術出版

澤井敦 (2000) 現代日本の死生観と社会構造 (上) 人間関係学研究, 大妻女子大学人間関係学部紀要, 創刊号, pp. 13-29

下仲順子・村瀬孝雄 (1975) SCT による老人の自己概念の研究, 教育心理学研究, 23, pp. 104-113

下仲順子 (1980) 青年群との対比における老人の自己概念—世代差、性差を中心として—, 教育心理学研究, 28, 4, pp. 39-45

白井利明 (1997) 時間的指向性の文脈的差異に関する仮説の検証：青年期から老年期にいたる時間的展望の生涯発達の变化, 時間的展望の生涯発達心理学, pp. 123-182

白井利明 (2006) 戦後日本の青年問題, よくわかる青年心理学, ミネルヴァ書房, pp. 10-11

丹下智香子 (1995) 青年期における死生観と心理的発達, 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 42, pp. 219-220

丹下智香子 (1999) 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討, 心理学研究, 70, 4, pp. 327-332

鑑幹八郎 (2002) 青年期とアイデンティティ, 鑑幹八郎著作集 アイデンティティとライフサイクル論, ナカニシヤ出版, pp. 207-208

辰巳有紀子 (2000) 日本の高齢者における死の不安と死生観, 聖心女子大学大学院論集, 22, pp. 49-64

Templer, D. L. (1970) The Construction and Validation of Death Anxiety Scale. The Journal of General Psychology, 82, pp. 165-177